図書館報
光丘
No.153

「徳の交わり」と「南洲翁遺訓」

公益財団法人荘内南洲会
理事長　水野貞吉

酒田市飯森山の麓に南洲神社と南洲会館があります。

神社は明治維新を成し遂げた西郷南洲翁と庄内藩の重鎮菅臥牛翁の二人を合祀しております。昭和五十一年六月に創建されましたが、神殿は飯森山を背景に一段高く、その前面に拝殿があります。神殿は伊勢皇大神宮の二十年毎に行われる遷宮の際に生じる御古材の払い下げを頂き、総桧造り、屋根は銅板葺となっています。両翁の大徳を偲び、学びの心を持っていつでも参拝できるように、との願いから建立された神社です。拝殿には、両翁の肖像画、西南戦争に庄内から参戦して戦死した伴、榊原2青年を偲ぶ解説、南洲翁の漢詩「獄中感あり」の木彫などを掲げてあります。

南洲会館は同年九月に竣工しておりますが、その後、南洲文庫、長谷川記念館、長谷川信夫先生と澤井修一先生の胸像ができています。境内には、「敬天愛人」、「南洲翁遺訓」、漢詩「幾たびか辛酸を経て志始めて堅し丈夫玉砕して甎全を愧ず一家の遺事人知るや否や児孫の為に美田を買わず」の石碑があります。石碑に刻まれている言葉はいずれも南洲翁遺訓に教えられていることばです。『敬天愛人』については、第二十一章天地自然の道に「道は天地自然の道なるゆえ、講学の道は敬天愛人を目的とし、身を修するに克己を持って終始せよ。…」とあります。第二十四章にも「道は天地自然の物にして、人は之れを行うものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も我も同一に愛したもうゆえ、我を愛する心を持って人を愛するなり」また、漢詩「幾たびか辛酸を経て…児孫の為に美田を買わず」は第五章「児孫の為に美田を買わず」で教えられています。南洲翁は此の漢詩を示されて「若し此の言に違いなば、西郷は言行反したるとて見限られよと申される。」とあります。

「南洲翁遺訓」の石碑は荘内南洲会の事業の基本は南洲翁遺訓であるとの姿勢を表しています。すなわち、荘内南洲会の願いとして、一つに西郷南洲先生の大徳の顕揚、二つには南洲翁遺訓の講究と弘布、三つには社会風教の作興に貢献することです。具体的には、南洲翁の真精神を明らかにすること。南洲翁遺訓を勉強し、多くの人たちに広めること。より良い人づくり、より良い社会づくりに貢献するということです。また、南洲翁と臥牛翁と対座した『徳の交わり』の銅像がありますが、碑文には次のように記されています。

『西郷隆盛(南洲)と菅実秀(臥牛)が対話しいるこの坐像は、鹿児島武西郷屋敷において両翁が親睦を深め「徳の交わり」を誓いあったことを記念して製作したものである。庄内藩は戊辰戦争で官軍に激しく抵抗したため厳しい処分を覚悟していたが南洲翁の公明正大な極めて寛大な処分となった。この南洲翁の大徳に感じ臥牛翁は明治8年自ら旧庄内藩士と共に訪鹿して南洲翁の教えを受け後にその教えを受けた人達の手記を集め「南洲翁遺訓」を発刊した。旧藩主酒井忠篤公は数名を各地に行脚させ全国に頒布した。

南洲翁の偉大さに傾倒し生涯のすべてを尽くされた荘内南洲会の創始者である長谷川信夫先生の遺志を継ぎ今庄内の一角に両翁の遺徳を偲び不易の教訓である「敬天愛人」の精神を永く後世に伝えるため、有志相諮り浄財を募り対話の坐像を建立した』

平成十三年九月吉日
財団法人荘内南洲会

臥牛翁は、明治八年に訪鹿しております。鶴岡から鹿児島まで「千里を遠しとせず」大部分を徒歩で五十日間かけて武村の南洲翁を訪ね二十日余り学んでおります。今年は戊辰戦争、明治維新一五〇年にあたり、NHK大河ドラマ「西郷どん」が放映されております。

企画展等が各地で開催されておりますが、飯森山の麓にある南洲神社にも全国各地から多くの方々が訪れています。

日和山木造灯台

元酒田市収入役　佐藤昭雄

暑き日を海に入れたり最上川（芭蕉）。日和山から眼下に広がる酒田港や最上川。そして日本海に沈む夕陽の眺望は、誰しも強い感動を覚えることでしょう。ここに酒田港のシンボルである白亜の木造日和山灯台が建つ。

〈二回の移設〉

百年余、日本海の荒波を見つめ続けたこの灯台は、最初のものは明治二十八年、最上川の左岸（宮野浦の海）に建てられた。棟梁は佐藤泰太郎（酒田市出身である。）

灯台の高さは一二・二メートル、周囲一八・四五メートルの六角形、光源のランプは光達距離が九海里であった。

その後大正十二年に大浜に移転を余儀なくされ、この頃から光源も炭素二散式電化となり、長い間、風雪に耐えながら、海の守り役として活躍してきたが、昭和三十三年（一九五八）大浜地区が、石油基地となって近代的な「高砂灯台」が完成したので、木造灯台は解体される運命となった。

酒田市では何とか保存したいと考えたが、当時の財政はそれを許さなかった。しかし、この話を聞いた浜っ子の市民が、町内組織を通じて保存募金活動に乗り出し、大いに市民の関心を呼んで四十三万円の浄財が集まり、日和山に移転が決定した。

大正初期の灯台

当時灯台移設工事の設計と施工を担当した市職員が、驚きの声を上げたのが一枚づつ外した灯台内側の内羽目板が、一枚毎にきれいな木目で手書きされていたのである。その裏側には当地の大工さんの名と住所が、墨で丁寧に書かれていた。今もそのまま残っていると思われる。十年以上も経って、着色が少しさびしくなった灯台も、ペンキを塗ったら生き生きとよみがえった。

〈陸から海に更に再上陸〉

灯台移動工事は難航した。陸から海へ、そして再上陸して三十メートル丘を登り、日和山の高台にセットするまで海陸それぞれ二キロメートルの道程である。今日のような機械作業でないから、陸では灯台を木ぞりに乗せ、ゴロを並べてウィンチで巻く手法で一日数メートルの牛歩戦術。

陸から海への乗替えは、坊主丸太を建て込んだ台船に吊り込み用のワイヤロープを浮上させたが、ロープが切断して大事故発生かと大騒ぎする一幕もあった。山登りは専ら人力作戦。灯台が傾き、坂から転落しないかと気を抜く暇もない作業の連続だったが、昭和三十三年五月、移転工事は無事完了した。

灯台の明かりになった夕日

昭和五十九年に酒田市は市制五十周年の大記念事業に、「日和山公園をより歴史的、文化的な公園」とするための大改造を行った。酒田港発展の恩人河村瑞賢翁像を造り、修景池には往年のスター役を果たした二分の一大の千石船を浮かべ、文人墨客の残した文学碑の散歩道もつくった。灯台と並び酒田港の夜明けを見つけたのはもちろん河村翁である、日和山に銅像を制作したのは、酒田市の彫刻家「高橋剛」であるが、江戸時代の紋型探しに苦労させられたと言っていた。

木造六角形の灯台では、日本最古であると思っていたのだが、ある日行われた市の文化人の会議で、西の堺市にも同形のものが存在しているという。そこで座長を務めていた佐藤三郎さんが、「日本最古の一つ」でどうだろうと意見を述べてすんなり決まった。

巨松の緑に映える白亜の灯台は、何と言っても浜っ子のシンボルであり、明治の遺産は観光客の目玉となっており山形県指定の文化財である。

満開の桜と六角灯台（日和山公園）

瞰海楼　小幡
～「酒田新聞」の記事より～

酒田市立図書館 副館長　岩浪勝彦

日和山のそば、桜小路（現日吉町二丁目）にある旧割烹小幡（瞰海楼）は、地理的に最上川河口を見渡すことができる位置にあったため、「眺望絶佳」が売りものの、明治初期に営業を開始した酒田を代表する料亭でしたが、平成十年に営業を停止し、その後、日本初のアカデミー賞外国語映画賞を受賞した映画「おくりびと」で洋館が脚光を浴び、現在、市による建物の再活用が検討されています。

大正初期に発行された絵葉書を見ると、現在洋館が立っている場所には和風の建物があったことがわかるほか、明治期には土蔵がなかったことがわかります。

現時点で確認されている料亭小幡に関する最も古い記述は、「会津嶺吹雪」に掲載されている福島県石川町の自由民権運動家、吉田光一が東北地方を遊説した際の手記「枢件日乗」中の来酒時の明治十三年一月のもので、「自由民権の先駆者 森藤右衛門」では、翌十四年九月には小幡楼で戸長選挙が行われたとの記述があります。

「風俗画報」の挿絵

地図では明治十六年発行のものに「オバタロウ」の記載があるほか、明治二十七年十月の震災被害図では焼失区域から外れるかたちで記載されており、桜小路のほとんどの建物が焼失した一方で、小幡はかろうじて焼失を免れたことがわかります。なお、震災前の瞰海楼がどのような建物であったかを伝える写真や絵は現在のところ発見されていません（明治三十年六月発行の「風俗画報」第一四二号に掲載の絵（池田興雲による挿絵）は震災後のものと考えられる）。

明治三十八年発行の「荘内案内記」中の料理屋の項目には、明治二十七年の震災以来営業していない旨の記載がありますが、明治三十一年のものと思われる小幡の領収書が光丘文庫に保管されているほか、明治三十四年八月十三日付けの岡本米蔵の日記（「商業界の七十日」）には、小幡でビールを飲んだ旨の記述があることから、地震の数年後には営業を再開したものと思われます。

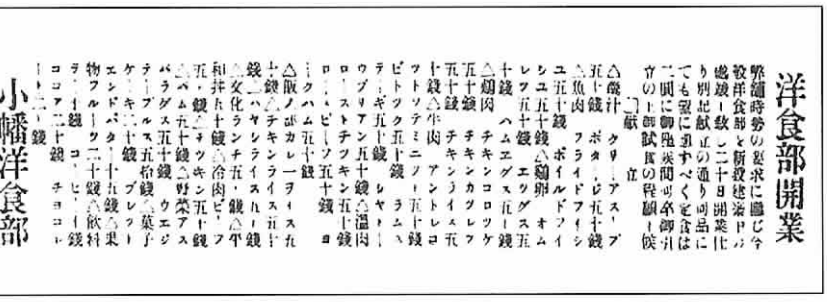
小幡に滞在した客の顔ぶれをみると、単なる料亭ではなく酒田における迎賓館的な使われ方をしていたようです。

大正三年の主な出来事をまとめた大正四年一月発行の「酒田新聞」の記事には、東京から来酒した政治家の接待の場所として小幡楼が三回出てくる一方で、宇八（のちの山王くらぶ）や相馬楼は一度も出てこないことから、小幡が当時の酒田で最もハイクラスな料亭であったことが伺えます。

また、大正十一年十月二十日付けの「酒田新聞」には洋館竣工により、洋食部開業披露宴の記事があり、東京の精養軒で修行した五味澤、渡部という二人のコックが洋食を出しているとの記述があるほか、本格的なフランス料理のメニューが掲載されており、積極的に新しい文化を取り入れようとする酒田人の気質を感じさせます。

滞在者名簿

氏　名	滞在時期			備　考
吉田光一	明治13年	1880	1月	自由民権運動家(福島県)
冨小路敬直	明治14年	1881	8月	明治天皇侍従
三島通庸	明治14年	1881	8月	初代山形県令
日下部鳴鶴	明治19年	1886		書家
高橋泥舟	明治22年	1889		武士
末松青萍	明治期			政治家(末松謙澄)
榎本武揚	明治23年	1890		逓信大臣
鮎松塘	明治23年	1890	10月	漢詩人
前島　密	明治23年	1890		逓信次官(郵便制度の父)
板垣退助	明治24年	1891	7月	政治家
河野広中	明治24年	1891	7月	衆議院議員
竜野周一郎	明治24年	1891		衆議院議員
副島種臣	明治25年	1892		政治家(内務大臣)
伏見宮貞愛親王	明治26年	1893	8月	陸軍少将・歩兵第4旅団長
西郷従道	明治26年	1893	9月	海軍大臣
巌谷一六	明治34年？	1901	11月	書家、貴族院議員、小幡に関する漢詩あり
河東碧梧桐	明治40年	1907	10月	俳人「三千里」に記載
巌谷小波	大正10年	1921	5月	児童作家、「俳味紀行」に記載
以下は宿泊なし				
岡本米蔵	明治34年	1901	8月	宴会のみ。実業家
後藤新平	明治42年	1909	8月	歓迎会のみ。逓信大臣
平田東助	大正4年	1915	9月	歓迎会のみ。内務大臣
原敬	大正6年	1917	9月	歓迎会のみ。衆議院議員(のち首相)
三矢宮松	大正10年	1921	5月	歓迎会のみ。内務省港湾課長
横山大観	大正15年	1926	10月	歓迎会のみ。日本画家
浦本政三郎	昭和3年	1928	6月	衛生会懇親会、東京慈恵医大教授



大正11年の洋食メニュー

現代詩との出会い

シテの会　阿蘇　豊

あれは高校三年生のいつ頃だったか。現代国語の時間だった。教科書にこんな詩が載っていた。

その馬はうしろを振り向いて
誰もまだ見たことのないものを見た。
それからユーカリの木の陰で
牧草をまた食べ続けた。
それは人間でも樹でもなく
また牝馬でもなかったのだ。
葉むらの上にざわめいた
風のなごりでもなかったのだ。
それは　もう一頭の或る馬が
二万世紀もの昔のこと
不意にうしろを振り向いた
ちょうどそのときに見たものだった。
そうしてそれはもはや誰ひとり
人間も　馬も　魚も　昆虫も
二度と見ないに違いないものだった。大地が腕も　脚も
首も欠け落ちた
彫像の残骸にすぎなくなるときまで。

安藤元雄訳、ジュール・シュペルヴィエルの「動作」という詩だった。よくわからなかった。いったい何を見たんだ。

「もう一頭の馬が、二万世紀もの昔にうしろを振り向いたときに見たものだった」だって？バカな！そう感じながら、なぜか強烈な印象を残した。詩は、わからなくてもいいんだ。答えを求めるんじゃないんだ。それから半世紀過ぎた今なら、確実にそう言える。だが、高瀬先生に「我がクラスの詩人、阿蘇、どう思う」と問われたあのときは、突っ立ったままドギマギ、あのその…

間もなく受験勉強に飽いた男たち六人で、詩の交換日記を始めた。今そのノートを開くと、他愛ない歌詞の真似事のようなものが並んでいるが、「詩を作ろう」という意識のスタートラインに立っていたことは確かだ。

いきなりですが、次の詩を読んでみてください。できれば声に出して。

きょうはなんにち
きょうは毎日だよ
かわいいひと
きょうは一生だよ
いとしいひと
ぼくらは愛し合って生きる
ぼくらは生きて愛し合う
ぼくらは知らない　生きるってなんだろう
ぼくらは知らない　日にちってなんだろう
ぼくらは知らない　愛ってなんだろう

ジャック・プレヴェール「唄」
（小笠原豊樹訳）

プレヴェールはシャンソン「枯葉」の作詞者であり、映画「天井桟敷の人々」のシナリオも手掛けた人。で、「唄」だが、まず、言葉の平明さ、明快さに惹かれる。伝わりやすい。そして、日本語訳でも感じられる音楽性。二十代前半の青年の心は最後の三行に特に奪われてしまった。

もちろん日本の詩も読んだ。好きな詩をノートに書き写して、そのパワーをもらおうとした。中原中也の「月夜の浜辺」もそんな一つだ。

月夜の晩に、ボタンが一つ
波打際に、落ちていた。
それを拾って、役立てようと
僕は思ったわけでもないが
なぜだかそれを捨てるに忍びず
僕はそれを、袂に入れた。
月夜の晩に、ボタンが一つ
波打際に、落ちていた。
それを拾って、役立てようと
僕は思ったわけでもないが
月に向ってそれは抛れず
浪に向ってそれは抛れず
僕はそれを、袂に入れた。
月夜の晩に、拾ったボタンは
指先に沁み、心に沁みた。
月夜の晩に、拾ったボタンは
どうしてそれが、捨てられようか？

中原中也の詩、他にたくさん胸に響く詩があるのに、どうしてこのさびしい作品に感応したのだろ。冴え冴えと月は光り、聞こえるのは波の音ばかり。ふと目にした一つのボタン。たった一人の浜辺で見つけたボタンは人の暖かさの象徴。だから無下に捨てられず、袂に入れてしまう。なんとはなしの人恋しさ。それを人を出さず、ボタン一つで表現している。

そんなふうにその時々で心を奪われた詩が現れ、自分でも詩を作り、詩の雑誌に発表することが習いとなっていった。そして今、酒田では「シテ」という詩の同人誌を数人の仲間と一緒にやっている。この六月で十八号を数えた。新号の発刊に合わせ、月に一回の例会を持ち、シテに掲載したそれぞれの作品について、相互批評を行っている。推敲を重ねた後載せた作品に、自分では気がつかなかった意見をもらうこともままあり、いい勉強の場になっている。

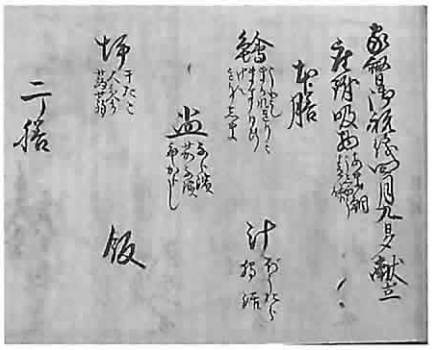
去年の十月に日本最大の詩人の集まりである「日本現代詩人会」主催の「現代詩ゼミナール〈東日本〉in酒田」というイベントが行われた。全国から四十人ほどの詩人と二十人ほどの一般の方を迎え、二十一日、二十二日の二日間にわたって執り行われた。イベントの内容は、吉野弘と黒田喜夫についての講演と両氏の詩の朗読、会員の自作詩朗読、二日目には酒田市内のスポットを巡る研修ツアーなどであった。そして、地元酒田での開催ということで、このイベントの運営にシテの会のメンバーが中心となって関わり、成功裡に終わったことは大きな喜びであり、ホッとしたことであった。

南吉田伊藤家文書より
文化二年大組頭伊藤源吉の祝い膳

光丘文庫古典籍調査員　阿部淳子

歴史学者磯田道史氏の著書『武士の家計簿』は、加賀藩士の家計簿から武士の生活をリアルに描き出したベストセラーですが、そのなかで子供のお祝いの席に「絵に描いた鯛」を出すという話があります。苦しい家計の中、なんとかしてお膳に鯛を出したいという親心が伝わってくる話でした。

では、江戸時代の庄内ではお祝いの席にどのような料理がでていたのでしょうか。光丘文庫所蔵南吉田伊藤家文書「家督祝儀覚帳」には文化元年（一八〇四）に吉田組大組頭になった伊藤源吉の祝いの席の献立が書き残されています。



「家督祝儀覚帳」献立の一部

最上川北側の庄内藩領では、藩の行政組織の下に近隣の数村が集まった「組」の大組頭という村役人がいました。南吉田村の伊藤家は荒瀬郷の大組頭を代々務めており、文化元年頃には吉田組（南吉田村、鶴田村、上野曽根村、吉田新田村）の大組頭と南吉田村の肝煎（村役人）を兼任していました。

源吉の父親久三郎は文化元年五月に病死し、同年八月十四日に悴源吉の家督相続が藩から認められました。「家督祝儀覚帳」には御祝儀をいただいた人の名前と金額や品物、祝いの席の献立が記録されています。祝いの席は翌年の四月九日と十日に行われていますが、九日の献立のうち、主な料理を見てみましょう。

〈本膳〉
鱠（なます）　うど　まかれい切り身
ます切り身　けん　きりしま
汁　ぼうたら　独活（うど）
盃　なら漬　茄子漬　当からし
坪　干たこ　人参　蒟蒻（こんにゃく）
飯

〈二ノ膳〉
猪口　たこ　桜煮
二ノ汁　さめ　すりミ　丸麩
むき茸　青味
平　鱸（すずき）潮煮　山椒め
引肴　金頭
酒肴　七種
御かし
御茶
後段吸物　しじみ
以上　千秋万歳

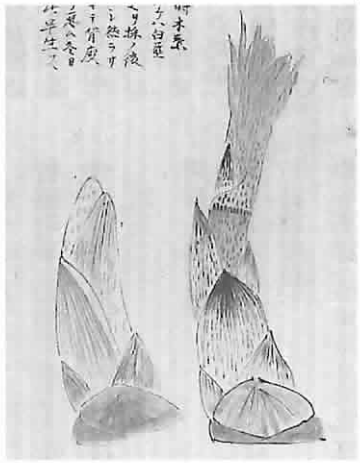
座附吸物　あま鯛　うしゆう
青味

吸物と汁が両方でていますが、松下幸子著『図説江戸料理事典』によると吸物は酒の肴として出すもので酒にあうように味は軽く薄めにし、汁は飯に添えるもので副菜となるように味は濃いめにするものでした。江戸初期には味噌味の吸物も多かったのですが、醤油の普及につれて醤油仕立てのすまし吸い物が多くなったとあります。また、鱠（なます）といえば今ではおせち料理でおなじみの「大根なます」をイメージしますが、当時は生の魚を細かく刻んで酢で味付けする料理のことをいいました。この日使った鱒はサクラマスでしょうか。うども使ってますし、季節を感じる料理です。

実は源吉の親久三郎が亡くなった翌月の六月四日には大地震があり、庄内北部と秋田県の日本海沿岸に大きな被害をもたらしました。この地震で象潟の地面が隆起し、芭蕉が見た美しい景色も一変しました。酒田町で全半壊した家は七百八十七軒、死者十六人との記録があります。荒瀬郷では潰れた家三百九十七軒、死者十六人、南吉田村では全半壊が三十八軒もありました。地割れなどによる田畑の被害も大きく、源吉は大変な時期に大組頭役を継いだのです。

献立の最後には「千秋万歳」と長寿や家の繁栄を祈るおめでたい言葉が書いてあります。慣例の言葉かもしれませんが、親が亡くなった後に大災害にみまわれて村の再建に奔走した源吉の思いがここに込められている気がしてなりません。

食べ物に関する興味から調べ始めた「家督祝儀覚帳」ですが、お祝い膳の背後にはその時代を生きた人のリアルな生活が息づいているのを感じました。



松森胤保『両羽博物図譜』よりウド

※参考文献

・渡辺実著『日本食生活史』吉川弘文館二〇〇七
・松下幸子著『図説江戸料理事典』柏書房一九九六
・杉原丈夫著「近世後期における大組頭の経営と動向について―羽州庄内川北大組頭制を中心に―」（『出羽庄内の風土と歴史像』地方史研究協議会編　雄山閣二〇一二）

図書館だより

国立国会図書館のデジタル化資料送信サービスについて

中央図書館では、四月から国立国会図書館による図書館向けデジタル化資料送信サービスの提供を開始しました。

このサービスは国立国会図書館で所蔵する絶版等により入手困難な約百五十万点の資料をデジタル化し、登録された全国の公共図書館等においてインターネット経由で閲覧できるものです。

閲覧には図書館利用の登録（通常の利用者カード）のみで、利用できますので、利用希望の方はカウンターまでお申し出ください。

「光丘文庫デジタルアーカイブ」について

絵図等の資料をデジタル化

光丘文庫は、酒田の歴史に関する数多くの資料を所蔵していますが、資料の多くが貴重なものであるという事情から、閉架式（所蔵資料は書庫内で保管）をとっていることもあり、全国の国文学研究者には高い評価を得ている一方、これまでは研究者以外にはなじみが薄いという面があったことは否めませんでした。

そこで、光丘文庫が所蔵する資料の中から古文書が読めない方でも視覚的に理解できるもの（絵図、地図、写真など）を選び、高精細画像に解説を加えて閲覧できるようにするほか、新たにデジタル化する「酒田市史年表」と画像をリンクすることにより、誰もが酒田の歴史について気軽に学ぶことができる基本ツールとなるものを目指して、無料で閲覧できるデジタルコンテンツを現在作成中です。

全国のデジタル自治体史を集めたサイトで公開

このデジタルアーカイブは、全国の自治体史をデジタル化して公開している「ADEAC」（アデアック）というクラウド型プラットフォーム上にて今年十二月上旬から公開の予定です。

明暦２年（1656）の酒田絵図

この「ADEAC」では、公開されている各自治体史（現時点で計八十一団体）の横断検索が可能であるほか、「国立国会図書館サーチ」内での検索対象ともなっていることから、光丘文庫に対する全国的な認知度が高まることが期待されます。

作成資金をガバメントクラウドファンディングで募集

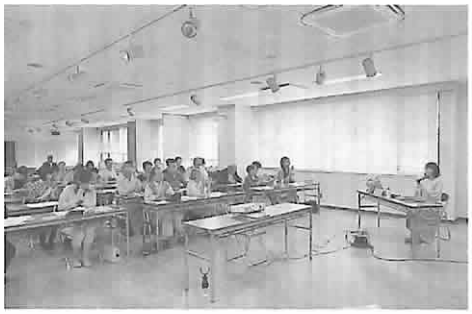
今回のデジタルアーカイブ作成に係る費用の一部については、ふるさと納税のしくみを利用して事業資金を募集するガバメントクラウドファンディングサイト「ふるまる」において資金を募集しています。募集の詳細については募集サイト「ふるまる」をご覧のうえ、事業の趣旨をご理解をいただき、ぜひご協力くださるようお願いいたします。

図書館・光丘文庫講演会について

光丘文庫所蔵資料を利用して開催している今年度第一回目の講演会として、六月十日、市美術館学芸員でジェンダー美術史を専門としている武内治子氏を講師として開催しました。

今回は「戦時期の女性と子どもの姿を追って～大衆雑誌の戦争イメージ～」と題し、光丘文庫が所蔵する太平洋戦争前後や戦時中の雑誌に描かれた女性や子どもの姿から、当時の国家が女子児童や女性に期待した役割の変遷に関する研究成果についてお話しいただきました。

また、今回の講演に合わせて、六月七日～十一日の期間、総合文化センター一階モールにおいて、光丘文庫所蔵の大正期～昭和初期に発行された女性向け雑誌等を展示し、この中には国立国会図書館でも所蔵していない太平洋戦争終戦時に発行されたものも含まれており、半世紀以上に渡って光丘文庫が保存してきた貴重な資料に多くの人が足を止め、見入っていました。


講演会の様子

【執筆者紹介】＊＊＊＊＊＊

水野貞吉（公益財団法人荘内南洲会理事長）

佐藤昭雄（元酒田市収入役）

岩浪勝彦（酒田市立図書館副館長）

阿蘇　豊（詩人）

阿部淳子（市立光丘文庫古典籍調査員）

岸谷英雄（酒田市立図書館長）

デザイン　佐藤十弥

発行　酒田市立中央図書館
酒田市立光丘文庫
酒田市中央西町二番五九号　電話(24)二九九六番
酒田市中町一丁目四番一〇号　電話(22)〇五五一番
印刷　明徴出版㈲